

## 巻頭言 「聖書の単純な言葉が力をもって」

宇野 元

早春の神戸松蔭女子学院大学のチャペル入口にて。さきほどまでのバッハ・コレギウム・ジャパンによる演奏に、体がほてるのを感じながら、休憩時間に外へ。階段の所に立ってある人と交わした会話。

「言葉がズシッと入ってきます。」そう言いながら、ひろげた手を胸に。その人が受けたものの強さが伝わりました。

応答する言葉が、それに及ばないのを感じつつ。「おっしゃるとおりですね。聖書の単純な言葉が力をもって。恵み、罪、……」

その日の演奏会で歌われた、私の心に残る二重唱の言葉を記します(BWV 125, 4)。

奇しき光が、全地をあまねく満たす  
力強く、たえず、響きわたるは  
この上なく有り難い約束の言葉  
信じる者は、救われる

18世紀の作品であるバッハの音楽には、現代の私たちの耳にすぐに馴染めない要素がいろいろあると思います。それにもかかわらず、時を越え、国の違いを乗り越えて、生き続けているのは、音楽と聖書の言葉が密接に結ばれていることと関係しているでしょう。

バッハの歌は、聖書の言葉をまっすぐ伝えます。神の言葉が「力強く、たえず、響きわたる」。神の言葉みずからが、道を切りひらいて進む。私たちの心の戸をあける。神の恵みは世を満たす。宗教改革の御言葉理解にもとづいて、信頼と喜びをもって、イエス・キリストの福音を告げます。「信じるものは、救われる」。

私たちの言葉もそのようであれば、そんな願いと望みを抱きます。もちろんバッハの音楽とはくらべられない。それをじゅうぶん承知していても。いたらない点を山ほどおぼえながらも。それでも、感謝と喜びによる証しから、人の心に伝わることを。聖書の単純な言葉が力をもって。